

辺野古沖海上基地建設反対運動の経過と特質

鐘ヶ江 晴彦

はじめに

沖縄・名護市辺野古沖の海上基地建設（「普天間基地移設」）計画に対しては、それが事実上決まった1997年以来、根強い反対運動がなされてきた。とりわけ、防衛施設局が「海底ボーリング調査」を強行しようとした2004年4月以降は、長期に渡る座り込みと海上での実力阻止行動が展開され、1年半もボーリング着手をくい止め、結果的に当初の基地建設計画を撤回に追い込んだ。

沖縄では、戦後多くの反基地闘争が闘われ、中には米軍基地内での新施設建設を断念に追い込んだ例もあるが、辺野古沖海上基地建設反対運動は、米軍基地本体の建設計画を撤回に追い込んだ点と、激しい海上での阻止行動が長期間継続された点、参加者と支援の輪の全国化という点で、画期的であった。

筆者は、2004年度に国内研究員として沖縄に滞在したときにこの運動に出会い、継続的な参与観察調査を実施した。2005年度以降も、研究を継続してきた。研究はまだ終了しておらず、とりわけ聞き取り調査等による参加者の特性分析は緒についたばかりであるが、反対運動の一つの区切りがついたことから、ここに、この運動の経過をやや詳しく示し、その社会運動としての特質を考察することにした。

1. 海上ボーリング調査阻止の座り込み開始以前

辺野古沖海上基地建設計画は、1995年9月の米海兵隊員による少女暴行事件で噴出した沖縄の反基地運動¹⁾を沈静化するため、同年11月に日米両政府が設置した「沖縄における施設及び区域に関する特別行動委員会（SACO）」が96年12月にまとめた最終報告で、普天間基地をはじめとする11施設の返還を決めた（SACO合意）ことに端を発している。（真喜志好一他、2000、51ページ）全国の米軍基地の75%（面積比）が集中し、さまざまな基地被害にみまわれてきた沖縄では、基地撤去は悲願であった。とりわけ市街地の只中にある海兵隊の普天間基地（ヘリコプターと中型輸送機の飛行場）は、騒音が甚だしく墜落等による人命への危険性も高いだけではなく、都市発展の妨げになっており、その返還は急務であった。しかし、SACO合意は7施設までが県内移設を条件とするものであり、普天間基地については「本島に撤去可能な施設を5～7年以内に完成し、その後返還する」とされた。

普天間基地の移設先は、SACO合意では「沖縄本島東海岸」とされ、事実上、辺野古沖に決められた。後に明らかになったところによると、米軍は復帰前に、辺野古周辺に埋め立て空港と軍港の建設を検討していた。この地域に

「普天間代替」施設ができれば、周辺の辺野古弾薬庫、キャンプ・シュワブ、キャンプ・ハンセン、北部訓練所を含め、海兵隊基地を一体的なものとして運用することができ、米軍にとっては願ってもないことなのである。

これに対して、地元辺野古区²⁾の住民は、1997年1月に「ヘリポート建設阻止協議会 命を守る会」（略称「命を守る会」）を結成し、比嘉名護市長が同年4月に事前調査受け入れを表明したため、5月には事前調査阻止のための監視行動を始めた。このような中で、名護市民の間には辺野古沖での基地建設の是非を問う市民投票実施の要求が高まり、「命を守る会」をはじめとする市民団体や労働組合は、6月に「ヘリポート基地建設の是非を問う名護市民投票推進協議会」（略称「推進協」）を結成し、市民投票条例制定署名運動を開始した。市民投票は、「推進協」の要求をねじ曲げた形のものではあったが10月に条例が制定され、12月21日に実施された。10月に「推進協」を発展的に解散して新たに結成された「海上ヘリ基地反対・平和と名護市民民主化を求める協議会」（略称「ヘリ基地反対協」）は、那覇防衛施設局の露骨な介入にも屈せず、市民投票で過半数の建設反対票を獲得するための運動を必死で行い、52.85%で勝利した。（浦島悦子、2002、76-89ページ）

しかし、比嘉名護市長は、投票の3日後に急遽上京して橋本首相と会談し、海上基地の受け入れと市長辞職を表明した。しかも、その後の名護市長選挙（98年2月）、沖縄県知事選挙（98年11月）では、いずれも建設容認の立場の候補者が当選してしまった。稲嶺新知事は99年11月、普天間基地の移設先は辺野古沿岸域とすることを表明し、岸本名護市長も12月に移設受け入れを表明した。政府はその翌日には、名護市が見返りとして求めた周辺地域の振興策と合わせ、移設先を閣議決定した。

「命を守る会」は、辺野古漁港前事務所での監視行動（座り込み）をはじめ、ヘリ基地反対署名行動（2000年6月から）、沖縄サミットに来県した森首相とクリントン大統領への直接請願行動（2000年7月21日）など、その後も粘り強く建設阻止運動を続けた。また、「ヘリ基地反対協」も、嘉手納基地包囲行動（2000年7月）、市民投票3周年名護市役所包囲行動・やんばる平和祭り（2000年12月）以降毎年の周年記念集会（2003年まで）など、さまざまな運動を展開した。

しかし、政府・県・名護市は2000年8月に「普天間基地代替施設協議会」を設けて建設案の検討を進め、2002年7月には、施設の規模（約2,500m×約730m、面積約184ヘクタール）、位置（リーフ上）、工法（埋め立て）を決めた。これは、名護市民投票で否定された「撤去可能な海上ヘリポート」（長さ約1,500m、面積約75～90ヘクタール）の2倍以上の規模であった。これを受けて2003年1月には政府・県・名護市による「代替施設建設協議会」が発足し、同協議会は同年12月、事業主体を防衛施設局とし、護岸部分を含めた埋め立て面積は約207ヘクタールとする「基本計画」を決定した。防衛施設局は、2003年4月8日から、環境影響評価（アセスメント）の準備と平行して、「現地技術調査」（地形・地質・気象、海象調査）を実施した。

それに対して地元の反対運動は、地域の中で賛成・反対に分かれて争うことへの疲れ、いくら反対しても「国策」には勝てないというあきらめや無力感、基地と引き換えの「北部振興策」「移設先・周辺地域振興策」への期待などから沈滞していった。「命を守る会」のメンバーも、当初の100人ほどから、10数名の“おじい・おばあ”を中心とするものになってしまった。「現地技術調査」の調査船は辺野古漁港か

ら出たが、これに抗議するために集まったのは6人だけで、ただ反対の声を上げるだけで調査を見守るしかなかった。

この時の経験を教訓として、運動の建て直しのため持たれるようになったのが、2003年7月12日から毎週行なわれた「土曜集会」である。土曜日の朝早く辺野古の浜に集合し、浜掃除（打ち上げられた海藻・海藻やゴミの回収）をした後、どうしたら調査を止められるか等についての話し合いが持たれた。この話し合いの中で生まれたアイデアが、動力船は人力で進む船の進行を妨げてはならないという海上交通のルールを逆手にとった、カヌーによる阻止行動を担うカヌー隊の編成である。これが決まってからは、土曜集会のたびにカヌーの練習が行なわれ、まったくの初心者や年配者も腕をあげていった。土曜集会を続けたことにより、海上基地建設を具体的に阻止する意欲と展望が生まれ、運動の輪も広まっていった。

また、東海岸住民を中心とする名護市民有志は、環境アセスメントについての連続学習会を経て、2003年5月、市民の側から環境アセスメントに主体的・積極的にかかわることによって計画の矛盾を明らかにし、著しい影響を回避するには建設しないことを事業者等にも理解してもらおうと、「市民アセスなご」を立ち上げ、『市民からの緊急提言書』の発表（同年7月）、『市民からの「方法書」』の発表（同年7月）等の活動を行なっていった。また、沖縄の環境・自然保護団体とヘリ基地反対協をはじめとする平和団体は、同年9月、「沖縄ジュゴン環境アセスメント監視団」を結成する一方、沖縄のジュゴン、3人の沖縄住民、ジュゴン保護基金など日本側4団体、生物多様性センターなど米国側2団体を原告とし、米国防総省とラムズフェルト国防長官を被告とする「沖縄ジュゴン『自然の権利』訴訟」をカリフォルニア北部地

区連邦裁判所に提訴した。これは、辺野古沖の基地建設はジュゴンの生息地を含む沖縄の自然環境を破壊し、米国の「国家歴史遺産保護法（NHPA）」に違反するとして、適正なジュゴン保護策を求めたものである。（浦島悦子、2005、30-44ページ）

この間、那覇防衛施設局（以下、「施設局」と呼ぶ）は、一般の市民、県民を対象とした説明会を一度も開くことなく、海底ボーリング調査の準備を進めた。「住民代表への説明で十分」との認識を示して、名護市と市議会、海上基地の影響を直接受ける行政区の行政委員への説明会しか開催しなかった。（黒田華、2004、108ページ）

環境アセスメント実施前にボーリングをすることについては、環境影響評価法違反との指摘が専門家からなされたが、施設局は「アセスの対象外である護岸構造の検討のため」「調査は工事ではないのでアセスは不要」などと言い張り、同年11月には沖縄県に、海底ボーリングの許可にかかわる「公共用財産使用協議書」を提出した。県は9人の専門家から意見を聴取（そのうち8人はボーリングに反対）したが、それを生かすことなく、2004年4月7日に「同意書」を提出した。

2. 座り込み開始から海上実力阻止行動開始前まで

施設局は、2004年4月19日、海底ボーリング調査のための作業を強行してきた。午前5時半、業者を含めて約80名で辺野古漁港に押しかけ、午前4時半頃から結集していた「命を守る会」メンバーや、緊急連絡を受けて駆けつけた市民（合計約120名）と揉み合いとなった。海上では、大時化の中、カヌー隊が一行に並んで漁港入り口を封鎖した。約1時間半の押し問答の末、

施設局は「海が荒れているので出航を中止する」と言って帰っていった。しかし午前11時頃、施設局員と業者は隙をついて、辺野古漁港内に作業ヤード（潜水調査やボーリング調査の資材置場）を作り始めたため、待機していた人々は体を張ってこれを阻止した。

このときから座り込みが始まった。座り込みは当初、作業ヤードの前で行なわれたが、5月初めからは、漁民の生活に配慮して、漁港入口の歩道上にテントを張って、台風の時を除いて毎日、午前7時から午後5時まで続けられた。この座り込みには、沖縄中はもとより全国から、毎日平均約100名が参加した。参加者は、地元のおじい・おばあ、沖縄各地の平和運動の担い手、毎朝高速道路を使ってやって来る中・南部在住の市民、近くの民宿に長期間泊まり込んでいる本土の学生や市民などさまざまであり、貴重な交流の時が持たれた。修学旅行や平和学習の一環として訪れ、説明を聞いて一緒に座る高校生・大学生も少なくなかった。座り込みのテント（いつの頃からか「テント村」と呼ばれるようになる）には伊江島土地闘争の指導者・故阿波根昌鴻のポスターが掲げられ、テント村責任者の一人は、参加者に繰り返し「ここでの闘いは、阿波根昌鴻に倣った、絶対非暴力の闘いだ。4月19日は思わず激しいぶつかり合いになってしまったが、今後は絶対、耳から上に手を上げてはいけない」と語った。（黒田華，2004，109ページ）

施設局職員は、当初は連日のように業者を連れてやってきたが、やがて、週に2～3回、建設課長以下の職員と業者の8～9名で、「工事をやらせてください」と言いに来るのが恒常化した。その度に、対応した数名の座り込み責任者たちから、ボーリング調査の不当性だけでなく新基地建設の不当性を、時には国際情勢や環境問題から、時には沖縄の歴史や民俗

から静かに諭され、ほとんど反論できずに、30分～1時間後には帰っていった。一度は、彼らをテントの中に招き入れ、おばあたちと膝を交えて語ってもらったが、92歳のおばあに、「あなたたちも親から生まれたんでしょ？」「この海があったから、沖縄戦で山も畑も焼かれた中で、子どもを育てることができた」と言われ、涙ぐむ職員もいた。施設局職員らは、9月初めまでに32回来た（ヘリ基地反対協，2005）が、すべて追い返された。

テント村では、前日に畳んだテントを立てることから一日が始まる。テントの中にシートと藁を敷き、受付の机、ノートやパンフレット、湯飲み、冷水などを整え、一息ついたところでミーティングが持たれ、座り込みの心得や運動をめぐる情勢等が話され、初めて参加した人の自己紹介やヨガ体操がなされる。長い座り込みの1日は、施設局職員等が来たとき以外は緊張感もゆるみ、時にサンシンに合わせて琉球民謡を唄ったり踊ったり、反戦フォーク歌手のミニライブが開かれたりした。また、ほとんど毎日、その道の専門家や体験者等を講師とする、ミニ講座が開催された。講座の内容は、ジュゴンと海草、やんばるの希少生物、陸地や海岸の動植物、環境アセスメント、沖縄の歴史、文学、沖縄の民俗や信仰、イラク訪問体験、国内・国際政治など、幅広いテーマに渡った。（大西照雄，2005，39ページ）

施設局が4月28日に公告した「普天間飛行場代替施設建設事業に係る環境影響評価方法書」（「方法書」）について、「市民アセスなご」や「沖縄ジュゴン環境アセスメント監視団」等のメンバーによるミニ講座が何度か開催され、6月16日の締め切りに向けて、欠陥だらけの「方法書」に対する意見書を一人でも多くが書くよう呼びかけがなされ、そのための机と用紙が準備された。（浦島悦子，2005，67-74ページ）

沖縄復帰の日を覚えて毎年実施されている「5・15沖縄平和行進」の東コースの出発点が辺野古になり、5月14日には全国から集まった約400人の市民、労働組合員がテント村を訪れて交流し、出発式を開いた後、降りしきる雨の中を普天間基地へ向けて行進していった。テント村にはしばしば、県議選（6月）の野党候補者、参議院選（7月）の沖縄地方区野党統一候補の糸数慶子さんと比例区野党候補者が訪れて激励し、交流会を持った。座り込みの常連メンバーの中には、県議選や参議院選の選挙運動手伝いのために、しばらく座り込みを休む人も少なくなかった。7月27日には、参議院選での糸数慶子圧勝の喜びの余韻が冷めやらぬ中、約500名が参加して「新基地建設阻止座り込み100日集会」が夕刻から開かれ、建設を断念させるまで断固として座り込みを行っていくことをアピールした。8月になると、テント村責任者の一人であるNさんが上京して呼びかけ、国会前での座り込みも開始された。

県議選や参議院選も終わったのでそろそろ施設局が強行してくるのではないかと、との囁きが交わされるようになった8月13日午後2時半前、宜野湾市に住む常連メンバーのYさんから、米軍のヘリコプターが目前で落ちたとの、悲鳴のような電話がテント村に入った。普天間基地所属の大型輸送ヘリコプターCH53Dが、沖縄国際大学構内に墜落・炎上したのである。奇跡的にも市民に死傷者は出なかった（乗組員の3人は負傷）が、大学本館は一部崩壊して壁が焼け焦げ、周辺広い範囲の民家・店舗に部品等が散乱し、壁、ガラス、襖等の破損や車、バイクの損傷は20ヶ所以上で発生した。米軍は、事故発生後いち早く現場に駆けつけ、大学職員も排除して現場を封鎖し、日本側の関係者や警察官の立ち入りすら制限した。この事故を、地元紙は次のように報道している。

十三日午後二時十五分ごろ、宜野湾市宜野湾の沖縄国際大学の一号館本館に米海兵隊ハワイ所属の大型輸送ヘリコプターCH53D一機が接触、学内の敷地に墜落し、炎上した。米軍人の乗組員三人のうち一人が重傷、二人が軽いけがをし、北谷町の海軍病院に運ばれた。民間人にけが人はいない。県警によると、事故当時ヘリが接触した一号館には職員が約二十人いたが危険を感じて逃げ、全員無事だった。事故後、現場周辺は米軍によって立ち入りが厳しく規制された。伊波洋一宜野湾市長や県の比嘉茂政副知事も一時、現場確認を拒否され、騒然とした。（略） 県警は現場で憲兵隊に実況見分を申し入れたが「機体の熱が冷めず、危険である」などとの理由で止められた。（略） 米軍は事故原因について「機体に不具合があったことは間違いないが、詳しい事故原因は調査中である」とコメントしている。現場付近の住民が、墜落の直前、バランスを崩したヘリから尾翼がもげ落ちるのを目撃。同市我如古の中部商業高校や、沖縄国際大学のグラウンド上空を機首を傾け不安定に下降するヘリを見たとの情報もある。（略） ヘリは全焼。一号館の壁は黒焦げになり、目撃者によると墜落したヘリからは大きな炎とともに激しい黒煙があり、辺りはガソリンやゴムを焼いたようなにおいが漂った。県警や米軍関係者が現場を立ち入り禁止にする中、学内は逃げ惑う学生らで混乱した。（沖縄タイムス社、2004A、1面）

この墜落事故により、「代替施設建設に要すると言われる15年間も普天間基地を放置できない」「危険な基地は沖縄県内にはいらない」との県民世論が盛り上がり、新聞社の世論調査では、辺野古移設について反対が8割を越え、賛成は1割に満たなくなった。市町村議会も、沖

縄島中南部を中心に、辺野古移設の見直しや中止を含む「普天間基地の早期返還」を次々に決議した。しかし国・防衛庁はヘリ墜落事故を逆手にとって「普天間の危険除去のためにも移設を加速する」と言うようになった。(黒田華, 2004, 109ページ)

8月31日、「施設局は辺野古沖のボーリング地質調査を来月6日にも着手する。その前の3日に名護市東部13区の住民説明会を開く」との報道が一斉になされた。住民説明会は、地域住民の要請を無視して地域も人数も制限して強行され、批判が渦巻く中で参加者の質問にはまともに答えなかったにもかかわらず、施設局は「調査着手に向けて手順は踏んだ」との姿勢を示した。しかし9月6日の調査着手は、台風のため、直前になって延期された。

施設局職員らは、8月13日のヘリ墜落事故後はパツリとテント村に来なくなったが、ボーリング調査強行着手直前の9月7日に12名でやってきた。ヘリ墜落事故の直前に来たときに「普天間基地は安全だ」と言ったことを追求されると、危険であることは認めた。しかし、8月に局長が代わったことなどを挙げ「これまで強行着手はしないと書いていた、その姿勢に変わりはないのか」との質問に対しては明確な回答を避け、事実上の最後通告に来たことを示唆して、2時間ほどで帰っていった。

台風のため閉じていたテント村が再会された9月7日からは、施設局の強行着手を阻止するために県内外から多くの人々が駆けつけ、約150人を越えるようになった。1日に何度も集会が持たれ、機動隊のゴボウ抜きに備えてスクラムの練習がされたが、緊張をほぐすためにサンシンと太鼓を伴奏に歌や踊りもなされた。いよいよ決戦の日が近づいている、という雰囲気がみなぎっていった。

3. 海上実力阻止行動開始から ウミンチュの決起前まで

辺野古の座り込みが144日目を迎えた9月9日、ついに基地建設作業の一環である海上ボーリング調査が始まった。

当日は、阻止行動に参加しようとする人たちが、沖縄中はもとより全国から駆けつけ、前の晩からテントに泊まり込んでいた人たちも含めて、その数はおおよそ500人にもなった。辺野古漁港あるいは隣のキャンプ・シュワブ（アメリカ海兵隊基地）から調査船が出ると報じられていたので、施設局の職員や請負業者が漁港や基地のゲートに来たら一斉に道路に座り込んで阻止するというのが、基本的な戦術であった。施設局側は機動隊を使って座り込みの排除にかかるものと考え、強風が吹き荒れ時折激しい雨が降る中で、ゴボウ抜きに耐える練習もやり、混み合ったテントの下で待機していた。

ところが昼過ぎになって、調査船が佐敷町の馬天港から午前9時過ぎに出たとNHKが報じている、との情報もたらされた。マスコミに偽情報をリークした上で50キロ以上離れた場所から出港したのである。NHKだけは正確な情報を掴んでいた（出港の映像まで流している）が、それはひた隠しにされていた。

調査船は午後1時頃には辺野古沖に到着するので、用意してあった数隻のモーターボート（以下、「阻止船」と呼ぶ）を慌てて出し、カヌー隊にも出動の指令が出された。カヌー隊は、土曜集会で練習を積み重ねてきた人たちに、座り込みが始まってから練習した人たちが加わって、10数名で編成されたものである。海は猛烈な時化で、カヌーは大波に翻弄された。沖のリーフに近づくと波は更に高くなり、波に持ち上げられた艇が落ちてきたために転覆する艇が出

るほどであった。カヌー隊はリーフの手前で待機したが、阻止船は果敢に調査船に近づいて抗議の声を上げながら作業を妨害し続けた。この日調査船ができたのは、63ヶ所のボーリング地点の内4ヶ所に、位置を示すブイを落とすことだけだった。

翌日は、リーフ外に大型の調査船が来ただけではなく、辺野古漁港から出港した中型漁船が後から「警戒船」や「監視船」の札を付けて調査船に随伴する、やはり辺野古漁港から出た小型漁船がキャンプ・シュワブの浜から施設局職員や作業員をリーフ外を調査する船に運んだり、リーフ内調査の作業船・警戒船・監視船になるなど、辺野古の漁船のチャーターとキャンプ・シュワブの利用が始まり、リーフ内での調査も開始された。しかし施設局は、時化のため午前中しか調査ができなかった上、阻止船が活躍したために、リーフの内外に数個のブイを落とすだけであった。カヌー隊は、辺野古漁港から漁船が出た午前9時過ぎから出動準備を整えて待機していたが、午前で調査は中止されたとの情報が入ったため、漁港の出口に一列に並んで出港を阻止する練習を行なった。

調査は、土日は行なわれなかったが、約3万人が沖縄国際大学グラウンドに集まり、「SACO合意を見直し、辺野古への移設を再考すること」も決議した「米軍ヘリ沖縄国際大学への墜落事故に抗議し、普天間基地の早期返還を求める市民集会」の翌日の9月13日には、その決議をあざ笑うかのように再開された。カヌー隊は、毎朝7時にミーティングを持って行動を開始し、午前・午後数時間ずつ海に出る。漁民との関係を良好に保つために出港妨害は行なわないことにし、2～4隊に分かれて、リーフ内に落とされたブイの近辺に停泊することにより、作業船等を寄せ付けないことを主な作戦にしていた。運動量はそれほどでもないが、強烈な沖縄の紫

外線に長時間曝されるため、体力の消耗は激しい。阻止船はリーフ外に出て、2隻の大型作業船に近づいて作業を中止するようハンドマイクで説得活動をし、聞き入れられない場合は、ギリギリまで近づいて進行を妨害する等、可能な限りのやり方で阻止行動をしている。

一方、テント村に残った人たちは、カヌー隊や阻止船の見送りと出迎え、漁港での施設局のチャーター船に対する説得活動、双眼鏡による施設局の動きの監視、トランシーバーや携帯電話による阻止船・カヌー隊への指示・連絡、ミーティングや新しい座り込み参加者への説明などを行っていた。

ボーリング調査の第一歩は、ボーリング予定地点の海底の状況（サンゴ礁の有無等）をダイバーが潜って調べ、写真撮影等を行なう「潜水調査」であるが、阻止船やカヌー隊の活躍により、9月17日までは、潜水調査はまったく行なわれなかった。しかし、連休が明けた21日、リーフ外では潜水調査が強行されてしまった。午前中は、2隻の作業船が黄色いブイのついたロープで海面に囲みを作り、その中でダイバーを下ろして作業をしようとしたが、阻止船がその作業を妨害し、ダイバーを海に入れなかった。しかし、昼になり、作業船・警戒船が昼飯を食べ始めたので阻止船も1隻を残して見回りに出た隙を突いて、ダイバーが飛び込んでしまった。それ以外のポイントでは、阻止船が先回りしてブイの周りを固めたため、潜水調査は阻止されたが、一つのポイントで潜水調査が実施されてしまったのである。

リーフ内では、カヌー隊が朝早く出発して、数ヶ所のポイント・ブイの周りで「海上座り込み」をしたため、潜水調査は阻止されていた。しかし、施設局は9月24日午後、台風の接近を理由に、リーフ内外のすべてのブイを撤去し、位置はGPSで特定できるためか、台風が去っ

た後もブイの再設置は行なわなかった。そのため、カヌー隊は東西二手に分かれて海上で待機し、作業船等が出てきたらその動きを追うしかなくなってしまった。作業が再開された9月30日、東側のポイントでダイバーを入れる様子を見せたので、東側のカヌーはそのポイントに殺到し、西側のカヌーも東に向かったところ、作業船等は急に錨を揚げて全速力で一番西のポイントに行き、カヌー隊が辿り着いたときには潜水調査が始められていた。カヌー隊全11隻が集まって作業船を囲み、何人かは海に潜ってダイバーの作業を監視したりしたため、途中で中止はしたものの、リーフ内でもこの日から潜水調査が始まってしまったのである。それまでカヌー隊は手漕ぎで移動していたが、この日の出来事を教訓として、翌日からは2隻の阻止船にそれぞれ5～6艘のカヌーがロープで繋がり、牽引してもらうようになった。リーフ内では、これから暫くは、ポイントに急行し潜水調査をしようとする施設局・業者と、阻止船に牽引されてそれを追いかけて、作業船を囲んでダイバーが飛び込むのを妨害する、口々に抗議の声を上げる、ダイバーが作業をしている上の海面をカヌーでぐるぐる周りパドルで叩く、シュノーケルで潜って作業を監視・妨害する、スクーバで潜って作業地点に横たわったり「作業をやめてください」と書いたボードを見せる、等を行なうカヌー隊との攻防が続いた。

これから当初計画の撤回までは約1年間に及ぶので、日付を追いながら、主な節目について説明する。資料は主として、筆者のフィールドノートと、「ジュゴンの家・日誌」(ジュゴンの家、2004-2005)、『辺野古一海のたたかい』(浦島、2005)、『愚直一辺野古からの問い』(大西、2005)による。

10月7日(木) 午前10時頃、小池沖縄・北海

道開発庁長官のキャンプ・シュワブからの現地視察に対して、カヌー隊と阻止船が海上デモを行なう。大臣らが立って基地建設予定海域を見ている場所(キャンプ・シュワブ内に設置された施設局の現場監督事務所前)の目の前の海に、一列に並んだり輪を描いて周り、マイクや肉声で抗議する。

11月1日(月) リーフ内では、10月中に三分の一程度のボーリング予定ポイントの潜水調査が終わり、この日から磁気探査³⁾が始まる。磁気探査はダイバーが潜り1 m50cmほどの筒状の機器を海底に降ろし、その機器を持って360度回転しながら調査を行ない、最後に写真を撮って終了というもの。短時間で済むため、カヌー隊が着いたときにはほぼ終了していることが多く、なかなか阻止できない。

11月16日(火) 前日から作業台船⁴⁾が、係留してあった中城湾から離れホワイトビーチ沖合に停泊していたので警戒していたところ、午前6時30分に「作業台船がホワイトビーチ近海より出航した」との連絡が入る。7時には、泊まり込みも含め、すでに50人が集まっている。午前9時30分、作業台船が辺野古近海まで迫っているとの連絡。阻止船4隻、カヌー隊22艇が準備を整える。出航前に命を守る会のおばあ、おじい「必勝祈願、安全祈願」のために浜辺に集まり「うがみ」をしてくれる。カヌー隊は大浦湾入り口の長島の島影に停泊し、2隻の阻止船が作業台船に向かう。阻止船は作業台船の前に入り込み、衝突寸前で台船をバックさせる。しかし4～5メートルの高波のため一旦戻り、テント村とカヌー隊に状況報告して昼食をとる。

12時30分頃、作業台船は長島、平島の近辺に停泊。2隻の阻止船は作業台船に近づいた

が、辺野古漁港より出航した警戒船が6隻も作業台船の周りを取り囲んでいる。2隻の阻止船は、作業台船を大浦湾に入れさせまいと決死の阻止線を張り、長島の沖合で一時作業台船が止まった。焦った警戒船が阻止船を排除しようとし、警戒船と阻止船の動きが入り乱れる。しばらくすると本格的に作業台船が動き出したので、また阻止船2隻で立ちはだかる。しかし、今度は止まろうとせず、阻止船は、ぎりぎりの判断の中で立ちはだかったり抜け出したりということを繰り返した。一度は、2隻の阻止船が作業台船の波に飲み込まれそうになり、互いに接触し1隻は横転しそうになる。それでも作業台船はじりじりと大浦湾に侵入していくので、ついに男性2人が作業台船の前に飛び込んで止めようとする。作業台船はその場で停泊せざるを得なくなり、午後3時30分、アンカーを下ろして、大浦湾に入ったところで停泊した。

11月17日（水） 午前9時、カヌー隊および阻止船が出航。外洋はものすごい高波のため調査は行なわれず、作業台船は大浦湾に停泊したままスーパー固定ブイの組み立て作業に入っている。しかし、スパット台船⁵⁾を積載したクレーン船も、同午前8時前に中城湾港を出港し、午後大浦湾に到着する。

午前9時30分頃、小型船8隻が2グループに分かれ、大浦湾側からリーフ内に入ってくる。それぞれ1隻には長さ4メートルほどの足場用の単管（鉄パイプ）が積まれている。カヌー隊、阻止船も2グループに分かれて行動。作業船は攪乱するために海を右から左へ、左から右へと猛スピードで進み、30分ほどして、豊原・久志集落の沖合2キロの地点で1グループが停止、アンカーを打つ。すぐさまカヌー隊が阻止行動のために展開し、作業船

2隻を取り囲む。作業船はオイルフェンスを降ろしはじめ、急いでカヌー隊が中に入る。作業船は作業をすることが出来ず、膠着状態になる。波が高いためカヌー隊員が身を守るため作業船に手をかけると、作業員がものすごい剣幕でカヌー隊の手を払いのける。作業員の行動がエスカーレートして暴力的になる。他の作業船グループがキャンプ・シュワブ沖合で足場建設を始めたとの連絡が入り、カヌー隊を二つに分けて行動しようとする。作業員達がこごぞとばかりに鉄パイプを海に投げ込もうとする。カヌー隊から叫び声が上がると、鉄パイプにしがみつくと。カヌー隊の女性が鉄パイプを降ろす作業を止めに入ると、興奮した作業員がカヌー隊の女性を船に引きずり上げ、何度も持ち上げ船にたたきつけた。現場の緊張は続いているが、作業員との交渉のもと、昼休みに入る。

午後に入っても膠着状態が続く。波がしだいに高くなり、カヌー隊は過酷な持久戦を強いられる。阻止船の内1隻は、キャンプ・シュワブ沖合で足場建設作業をしている作業船へと向かう。操縦していたNさんは、船を泊めて一人で潜り、海底での調査の阻止を試みたところ、作業員のダイバー達に酸素マスクをむしり取られ、ウェイトを外され、ウェット・スーツに無理やり空気を注入された。この日は結局、一ヶ所の作業は完全に止めたが、キャンプ・シュワブ沖合で、ボーリング用足場の水中部分が設置されてしまった。

11月18日（木） 午前8時、辺野古漁港より作業船、警戒船が出航。カヌー隊と阻止船も出航。阻止船2隻とカヌー隊3艇は、昨日建てられてしまったボーリング作業槽に向かう。まだ半分もできていないが、20本ほどの鉄パイプが海面に突き出し、その周りをオイルフ

エンスが囲んでいる。カヌー隊は艇をオイルフェンスの中に入れて海に入り、鉄パイプにしがみついて夕方まで過ごす。阻止船はその周りに停泊。完全にここでの作業を止める。

しかし、西側では激しい攻防戦があった。資材を積んだ作業船が猛スピードでポイントへと向かい、曳航されていたカヌー隊はすぐさまそれを追う。ポイントに到着した作業船からダイバーが降りる。急いでカヌー隊が曳航を解きポイントへと向かうが、警戒船が3隻でもって阻止線を張る。何艇かのカヌーが阻まれたが、すり抜けたカヌーがポイントへ入り資材を降ろす作業を阻止。施設局はすぐさまそのポイントあきらめ、猛スピードで次のポイントへと走っていく。急いでカヌー隊が集合し、阻止船にロープで繋がり、曳航されて移動する。次のポイントではすでに鉄パイプが海中に降ろされ、ダイバーが組み立てを始めている。警戒船の乗組員は、カヌーをつかまえ風下に引っ張っていく、パドルを取り上げ海に流す、カヌーをロープでくくりつけて動けなくするなど、うねりの激しい海上で危険な妨害行為を行なう。それをかいくぐってカヌー隊がポイントに入り、パイプにぶらさがったりすると、作業員はそれを振り落とし、艇ごと転覆させた。

11月20日（土） 施設局は、これまで土日と祝日は作業を休んでいたが、この日は初めて土曜日にも作業を行なった。午前7時に大浦湾に停泊させている大型の作業台船からスパット台船を降ろし、タグボートで辺野古沖に移し、リーフの外のボーリング調査予定地点で機材を降ろし設置作業に着手した。それに気づいたテント村では、大急ぎで阻止船を向かわせ、阻止行動を展開した。多くの監視船が周囲を取り囲んでいるため、何度試みても台

船に近づくことができない。作業はどんどん進められ、9時過ぎには、4本の支柱が海底に固定されてしまった。掘削を阻止するため、一人が阻止船からスクーバで潜ったところ、水深15mの海底で、スパット台船の足やアンカーによって、サンゴがメチャメチャに破壊されているのを発見した。

一方、カヌー隊は、8時過ぎ、施設局にチャーターされた漁船が辺野古漁港を出て、資材や作業員を積むためキャンプ・シュワブに向かったのであわてて出発し、阻止船に曳航されて建設中の5ヶ所の足場（内2ヶ所はパイプの組み立てがほぼ完了）に向かう。各足場にカヌー2～3艇をロープで繋ぎ、カヌー隊員は足場に登り、細いパイプの上に立ったり座ったりして一日過ごした。施設局側は、2社の業者が、それぞれ担当の足場の組み立てを行なうため隙を見て作業を強行してきた。作業船を強引に足場に横付けし、数人の作業員が一気に櫓を登って船から渡される鉄パイプを受け取り、それを組み立てていく。カヌー隊員は、パイプを上げさせまいと押さえたり、組み立ての金具を付ける場所を手で押さえたり妨害したりするが、人数と体力に差がありすぎ、次々と引き剥がされたり押さえ込まれてしまう。こうして、夕方までに、リーフ内には5ヶ所の足場が組まれてしまった。

夕方には、岸本建男市長の普天間代替施設受け入れ撤回を求める「11・20名護市役所包囲行動」が行われた。約400人の参加で庁舎を2回包囲、「市長の受け入れ7条件は実現されず、知事公約の15年期限も日米政府に否定された。普天間基地の移設を撤回し、即時撤去せよ」と訴えるアピールを採択した。

11月22（月） 午前7時半、カヌー隊と阻止船出発。この日からは、先に足場櫓（以下、

「槽」と呼ぶ)に登って占拠し、作業員を足場に近寄せないようにする戦術をとることにした。しかし施設局は、人数が少ない足場を狙って、作業を強行してきた。作業船が強引に槽に横付けし、素早く作業員が登って、掘削機材をロープで槽の上に引き上げようとした。槽の上にいる2人は、ロープをつかむなどの激しい阻止行動を展開した。ここでは掘削作業用のモーターなどの積載を許してしまったが、それ以外の槽では、足場板を数枚敷かれてしまった1ヶ所を除いて、作業は完全に阻止された。

リーフ外に設置されたスパット台船は、この日にもボーリングを開始すると言われていたので、阻止船が張り付き警戒していたが、結局この日は作業が行なわれなかった。それは、この日、スパット台船の足やアンカーがサンゴ礁を破壊したことが一斉に報道されたからであろう。サンゴ礁破壊問題は、その後ますます波紋を広げたため、施設局はボーリングに着手できなくなった。

この日から、作業員の暴力的対応が目立ち始めた。足場板を敷かせない、ボーリング機材を上げさせないために非暴力⁶⁾の抵抗で阻止しようとするのに対して、蹴る、首を締める、はがい締めにする、突き落とすなどが行なわれた。中には、ライフジャケットを剥がされて海の突き落とされた人もいた。

11月26日(火) 午前7時過ぎ出発。2隻の阻止船がそれぞれカヌーを曳航し、東西に分かれて、東側2ヶ所、西側3ヶ所の槽にカヌー隊を配置して行く。午前9時30分、作業船が出てくる(リーフ内は小型船8隻)。作業員は、隊員が3人しかいなかった一番東側の槽にまず乗り込み、作業を強行しようとしてきた。2段目あたりまでパイプの組み立てをさ

れてしまったが、カヌー隊員3人が精一杯の力で鉄パイプを押し返し、それ以上はさせなかった。

午前11時頃になると、作業船は、ほぼ建設が完了した東から二番目の槽に、8隻すべてで突っ込んできた。槽にいた6人に対して、18人も作業員達が建設強行のために登っていた。

その中で、作業員達がカヌー隊員を取り押さえているのを写真に納めようとした女性の顔を、作業員がカメラごと蹴りとばすということをした。また、作業員がカヌー隊の男性を取り押さえ、頭の上に乗って体重をかけたため、彼は口の中を切り、血がかなり出た。さらに、鉄パイプの搬入を阻止しようと試みたカヌー隊員を、作業員数名が押さえつけロープで簧巻きにしようとした。高速ゴムボートでリーフ内を警戒していた海上保安庁も、それを見て動かざるを得なくなり、「双方がこの槽を降りて欲しい。陸上で事情聴取をさせてもらいたい」と言ってきた。それをもって、施設局はこの日の作業を中断した。午後1時30分にはカヌー隊員・阻止船乗組員も陸に上がり、弁護士を交えて事情聴取が行なわれた。

12月1日(水) 朝、作家の灰谷健次郎さん寄贈の大型モーターボートが到着し、就航式を行なう。施設局のチャーター船の船長等が辺野古漁港に現れないので、カヌー隊員と阻止船乗組員は、いつでも出られるようにして陸上で待機。昼頃、シュワブの浜で、水陸両用艇が6艇出て、海兵隊の演習が始まる。演習が終わると、作業船が動き出したとの連絡を受け出動準備をするが、まさにカヌーを出そうかとしたその時、作業中止の連絡が入る。さらに、季節外れの台風の接近を理由に、ス

バット台船を積載用台船に戻し、スーパー固定ブイを載せた台船と共に、大浦湾を出て中城湾に戻って行った。また、明日以降、三箇所の槽に上げられていたボーリング用の機材並びに木の板を回収し、未完成の一ヶ所は単管を全て回収するとの連絡も入った。

12月7日（火） 昨日まで台風のため作業がなかったが、波もだいぶ治まり、午前9時頃、辺野古漁港が騒がしくなった。作業船、警戒船にエンジンがかけられたので阻止船を出港させ、作業船がキャンプ・シュワブの浜辺で資材と作業員を乗せている間にカヌー隊を曳航しポイントに配置した。午前中は、東から二番目の槽で、オイルフェンスを槽の周囲に張りたいという申し出を拒絶して諦めさせる、西側のリーフ近くに建てられた槽で、台風時に取った足場板の搬入を1時間以上の攻防の末に阻止するなど、阻止行動は順調であった。

午後になって、午前中オイルフェンスの搬入を止めた槽を作業船4隻が囲み、資材搬入を強行してきた。この槽は、これまでの経験から女性に対しては手を出しにくいだろうと考え、女性だけで守っていた。しかし作業員達は、手を出さないどころか、これ幸いとばかり襲いかかり、搬入した足場板で頭を押さえつける、足場板や単管を掴んでいる手を無理やり引き剥がすなどした。そのような中で、作業員が単管を掴んでいるAさんの両手を振り払ったため、彼女は背中から真逆さまに落ち、ちょうど下にいた作業船の上に首から落下して、そのままピクリとも動かなくなった。カヌー隊の女性たちは悲鳴をあげて彼女の元に駆け寄り、「死んでしまう!」「作業をやめて!」などと叫んだが、作業員達は意識を失っているAさんの傍から足場板を次々に上げ、敷き終えてしまった。10分ほどしてA

さんは自力で起き上がったが、顔が真っ青になっている。ここでやっと海上保安庁が作業を中断させたので、彼女を漁港に連れ帰り、すぐに病院へ運んだ。

12月9日（木） 体力の消耗を避けるため、いつもより少し遅い7時30分に、東へ向かうカヌー隊が阻止船に曳航されて海上に出たところ、第1ポイント⁷⁾に多くの船がいるのが見えた。あわてて第2ポイント近くで担当のカヌーを離し第1ポイントに向かうが、施設局の船に進路を阻まれて近づけない。カヌーは監視船や警戒船に捕まって遠くに連れて行かれて転覆させられ、泳いで第1ポイントに近づこうとした者は、作業ダイバーに下から足を引っ張られたり、髪の毛を掴まれたりした。第1ポイントではどんどん作業が進み、すべての機材が上げられて、スイッチを入れればボーリングをできる状態になった。夕方には、槽全体を金網で覆ってしまった。

この日、第2、第3ポイントでは作業をすべて阻止した。第5ポイントでは、足場板が乗せられてしまったが、それ以上の作業は阻止した。ここでは、槽に登っていたカヌー隊員が、応援に来た阻止船を槽に固定しようとしているところを作業員に押さえつけられ、腰を痛め病院に送られた。

12月10日（金） 前日の教訓から、カヌーはかえって足手まといになるので使用をやめ、船で槽に向かうことになった（以下では、「カヌー隊」の呼称をやめ、海上で阻止行動に携わる者は、すべて「阻止隊」と呼ぶことにする）。この日は、第1ポイントに重点的に阻止隊を送り込む。金網を掛けられているが、つなぎ目があるので、その隙間から一人ずつ入り槽に登る。施設局は第5ポイントを集中

的に襲い、その中でまた1人ケガをさせられた。単管足場のパイプにしがみついていた男性を作業員がパイプから引き離したため、彼は仰向けの状態で転落し、海中にあったパイプに頭を強くぶつけた。男性は一時意識を失い、海面に浮かんでいたところを発見され、阻止船が収容して辺野古漁港まで運び、救急車で搬送された。

4. ウミンチュの決起から当初計画の撤回まで

12月13日（月） この日から、情勢が一変した。辺野古に隣接する宜野座、金武、石川と国頭のウミンチュ（漁民）達が、9隻の船で応援に来てくれたからである。ウミンチュが用意した「わたたー（われわれ）の海を守ろう」などと書いた筵旗を掲げ、テント村の船と合わせて総勢14隻で出港した。各ポイントに3隻ずつが張り付いて櫓を閉鎖し、作業を完全に阻止した。

海上基地建設による海の環境破壊に不安を持ちながらも静観していた近隣漁民の決起を促したのは、国頭漁協のYさんの呼びかけであった。出身地の石川市で潜り漁をやっていた30年余り前、火力発電所建設のための埋め立てで海が死に、沿岸漁業が壊滅した状況を見てきたYさんは、時々座り込みに参加する友人から訴えられ、現場を見に来て、計画されている海上基地の巨大さに驚いた。この大規模埋め立ては絶対にやらせてはならないと直感した彼は、11月下旬、まず1人で阻止行動に参加した。参加した途端に暴力事件が相次いだことなどから、彼はヘリ基地反対協の役員らを伴って精力的に近隣漁協を廻り、現場の状況と、埋め立てや基地建設の影響を訴え、共感を得たのである。（浦島、2005、134

—135ページ）

12月21日（火） ウミンチュの決起以来、作業はまったく行なわれていない。阻止隊（毎日20名位）は毎朝6時半に集合、ミーティングの後、7時頃に見送りを受けて各櫓へ出発。阻止船から櫓に乗り移って風よけの筵（スローガンが等が書いてある）を張るなどしていると、8時頃ウミンチュの船が到着し、テント村の阻止船（各櫓に1隻ずついる）とロープで繋ぐなどして櫓を閉鎖する。後は、双眼鏡での監視とトランシーバーでの連絡に努めながら、雑談、読書、昼（朝？）寝、シューケーリング、編み物⁸)など、思い思いのことをしながら施設局の船団を待つ。時にはウミンチュも櫓に乗り込んできて、海の話や漁の話聞かせてくれる。施設局がやってくると、一斉に海の側を向いて櫓や舷に立って構えるが、施設局は大抵、櫓の周りをぐるぐる廻って写真を撮るだけで引き揚げて行くか、現場監督が「今日はこれこれだけやらせてほしい」と申し出てきて、櫓の安全確認や安全灯の電池交換など（安全にかかわる作業だけは認めることにしている）をして帰っていく。

名護市民投票7周年のこの日、辺野古のイノー⁹)で海上デモが挙行され、30隻近い船が朝から阻止隊が守っている4本の櫓を廻っていった。横断幕や大漁旗をたなびかせ、手を振り合い、一緒に海を守っていこうと呼びかけた。

地元の新聞は、この日の様子を、次のように伝えている。

名護市辺野古沖での海上基地建設の是非が問われた名護市民投票7周年を迎えた21日、建設予定海域で基地建設に反対する市民団体などが海上パレードをした。近隣市町村の漁

船も含め27隻に約350人が参加して船に乗ったり、辺野古漁港で歌を歌い踊りながら、市民投票で出した「基地建設反対」の意思をあらためて確認した。

辺野古漁港には同日午前から、続々と人々が集合。午後1時すぎ、大漁旗をはためかせた漁船20隻を含む船団が予定海域で列を作って行進。約2時間にわたり、長く阻止行動を続けてきた市民団体や漁船が一団となって建設反対を訴えた。(琉球新報社、2004)

夜は、名護市役所前で約300人が参加して、ろうそくの明かりで辺野古移設反対を訴えた集会を開き、その後ヒンプンガジュマル広場までデモ行進をした。

2005年1月13日(木) 今日にはスパット台船が来るというので朝から警戒していたところ、午前9時半頃、台船が再び辺野古沖に現れる。台船には警戒船がびっしり付いているが、阻止船もどンドン集まり、6隻が交互に台船の前に入り、動きを止める。午後2時すぎ、辺野古沖で停泊していた台船のクレーンが上がり、スパット台船を吊り上げ始めた。しかし、阻止船がスパット台船を降ろす場所に入り込み、積み下ろしを阻止する。双方合わせて21隻の船が壮絶な攻防を繰り広げ、その状況はテント村と各櫓に無線で刻々と伝えられる。午後5時頃、ついに台船は設置を諦め、中城湾に引き揚げていった。

1月28日(金) 午前7時、暗い中で辺野古漁港を出港、櫓へと向かう。途中で東村、国頭、宜野座、金武、石川のウミンチュ達と出会う。手を振って確認する。この日は、全国から民医連のメンバー約200人がテント村に駆けつけ、1日座り込みに参加して、交代で船に乗

って櫓の阻止を激励して廻り、一部の人は櫓での座り込みに参加した。各櫓の状況は次の通り。

第1櫓 午前中に作業船等が来て「写真を8枚撮らせてほしい」と申し出てきた。「それだけなのか」との問いに「この櫓では写真撮影だけで、その他の作業は今日には行かない」と言った。警戒を崩さず、いつでも阻止する体制をとりながら写真撮影を監視した。

第2櫓 午前中に、現場監督から「腐りかけている鉄パイプ2本を取り替えさせてほしい」との要求があったが、「ボーリングに関わる作業は撤去以外すべて認めない」と拒否。ウミンチュのYさんが、防衛施設局長、作業員に三線を披露。三線を弾いた後に、「ずっと語り継がれている、沖縄に沖縄を返しなさいとの歌だ。基地によって奪われた沖縄を取り戻す願いが込められている。ここに基地は作らせてはならない」と解説。

第3櫓 午前中は何もなかったものの、午後になり波が3mにも達したので阻止船を一度櫓から離れた途端、作業員が乗り込み、足場板を無理やり敷こうとした。第1櫓に張り付いていた阻止船がすぐに応援に来て阻止行動に参加。阻止隊6名と作業員7名とが入り乱れての攻防戦となった。足場板を作業船から上げようとする作業員、足場板にしがみつく阻止隊員。櫓の上部には既に足場板が乗せられており、作業員数名が上がり足場板を敷く作業を強行しようとする。それを阻止隊員が板にしがみつき止めに入る。30分にわたる攻防の結果、持ち込もうとした足場板を撤去させた。

第4櫓 作業船等4隻が来るものの、写真撮影をするだけで終わった。

2月4日(金) 朝から波風が高い。各ポイン

トとも、やっとの思いで槽に乗り移り、阻止船を係留する。第3槽では、9時半頃来た作業船から、ダイバーがいきなり海に飛び込んでクランプ¹⁰締め作業を強行。それに対して槽に登っていた4名が飛び込み、周りの海でダイバーとの追いかけあいになり、作業は一切させず追い返した。午後はどのポイントも波が高く、作業船も港に引き上げたため、午後1時30分頃、すべての阻止船が引き上げた。

ところが3時前、普段は警戒船をしている2隻の漁船が辺野古漁港より出航。警戒船を追いかけていくとキャンプ・シュワブの浜でダイバー、作業員が警戒船に乗り込んでいる。完全な奇襲攻撃である。テント村に応援を要請し、第3ポイントに向かっている警戒船を追いかける。槽に近づくと、警戒船は意図的に阻止船におつかり、動きが鈍くなった瞬間にダイバー4名を飛び込ませ槽に登らせた。船に乗っていた阻止隊員が一人で槽に登り、立ち向かった。阻止船を槽に係留しようとするが、波が荒く困難な作業が続く。その間に登った一人はダイバーに取り押さえられ、槽の上では足場板を敷く作業が強行されている。他の作業船4隻も、槽に次々と係留を開始するし、新たな足場板を搬入しようとしている。応援の阻止船も駆けつけ、新たに4名の阻止部隊が到着。一番上の足場板は敷かれてしまったが、二段目の足場板は敷かせまいとパイプにしがみついて抵抗。それをダイバーが引き剥がしにかかる。また新たに到着した阻止船から3人が泳いで槽に取り付き、計9名が阻止に入る。作業員たちの顔色が変わり、やがて諦めて撤退を開始する。第1槽が狙われる可能性が出てきたので無線で連絡をとると、緊急事態に駆けつけてくれたウミンチュの船が守ってくれおり、完全に阻止されていると

いう。

2月6日(日) ウミンチュ達の発案による海上デモが、午前10時30分より辺野古のイノーで行われた。「海は宝 海人の宝」といったメッセージの書かれた旗や「基地建設反対・ヘリ基地反対協」の旗、大漁旗を掲げた計24隻の漁船が参加。辺野古海域では平和丸(反対協の阻止船)が、巨大なジュゴンのバルーンを船尾につけて海に流している。辺野古の浜では、オバア達など100人近くが手を振って海上デモを激励。船団は、海上をジクザクに航行しながら槽の周りを囲っては円陣を組む。浜辺からは三線の音色にあわせた歌が聞こえ、船の上ではカチャーシー¹¹を踊る人がいれば一緒に歌う人もいる。1時間ほどで感動的な海上デモは終わった。

2月7日(月) 沖縄タイムス、琉球新報は一面トップで「辺野古移設見直しを検討」と、次のように報じた。

「政府は六日、暗礁に乗り上げている米軍普天間飛行場返還問題を打開するため、一九九九年に閣議決定した名護市辺野古沖への移設計画の見直しを、今後の在日米軍再編協議の議題として取り上げる方向で検討に入った。政府、与党関係者が明らかにした。移設計画に関しては、実現の見通しが立たないため米側が見直しを提起、日本側が拒否した経緯がある。今回、日本側からの提起を検討するのは、昨年八月に同飛行場近くの市街地で発生した沖縄国際大学への米軍ヘリ墜落事故で返還の早期実現を求める声が高まっていることに加え、本格化する米軍再編協議で普天間返還実現を『地元負担軽減の目玉』と位置付け、世論の理解を得たいとの判断もあるようだ。

日米両政府は九六年の特別行動委員会(S

A C O) 最終合意で『沖縄本島東海岸沖』への移設を決めたが、今後の協議次第でS A C O合意の抜本見直しにつながる可能性がある。」(沖縄タイムス社, 2005A)

朝, テント村では, この話題で持ちきりだった。口々に「よかったねー」と言い合い, 飛び上がって喜ぶ者もいた。しかし, 命を守る会の金城佑治代表は, 「われわれの運動が実りそうだ。しかし, まだ喜ばない。日米協議を慎重に見守りたい」と, マスコミに対して冷静にコメントしている。

波が荒いため, 阻止隊はいつもより少し遅れて海に出た。各槽とも, 写真撮影しかやらせなかった。

3月7日(月) 午前7時に阻止船を出港させると, 外洋に巨大な帆船が来ているのが見えた。グリーンピースの「虹の戦士号」(総トン数555トン)である。9時過ぎには, 各槽に虹の戦士号から来たゴムボートが1隻ずつ張り付いた。施設局は4つの槽とも作業が一切できず, 引き上げていった。夕方, 虹の戦士号の乗組員がテント村を訪れ, 金城佑治さんは, 「世界で活躍している人達が来てくれてうれしい。心から歓迎いたします。今, 世界ではあらゆる災難が起っています。その世界の危機に立ち向かう人々が私達の闘いに参加してくれることを, 心から歓迎いたします」と挨拶した。

3月12日(土) 午前中, グリーンピース主催の海上パレードが行われた。グリーンピースのスタッフが板で作った体長10メートルのジュゴンに乗せたゴムボートを先頭に, 阻止船, グリーンピースのゴムボート, カヌー, ウィンドサーフィンの計25隻に90人以上が乗り込んで, 四ヶ所の槽を廻った。その後, テ

ント村で, 今日で辺野古を離れる虹の戦士号の代表に, 金城祐治さんから千羽鶴のプレゼントが贈られた。

3月16日(水) 午前7時, 阻止船が海に出ると, 既にスパット台船が浮いていた。夜中に中城湾を出て, 途中で台船から下ろし, タグボートで曳航してきた模様。作業の規定では, 夜間に餌を摂るジュゴンへの配慮として, 日の出から1時間後の作業着工としているので, 明らかな規定違反である。施設局にチャーターされた辺野古の大型船10隻以上, 海上保安庁の大型船3隻, ゴムボート6隻がスパット台船の回りを取り囲んでいる。阻止船7隻が急行し, 約30隻以上が入り乱れて攻防を繰り返した。台船に近づいただけで暴力的に制止され, 排除された。海上保安庁は, これまでの「中立」姿勢をかなぐり捨て, 阻止船を停止させ, ロープでけん引してスパット台船から遠ざけた。強引なけん引で1隻の阻止船のハンドルが破損して操船不能となり, ゴムボートのエンジンが海中に脱落し, 女性1人が殴られた。しかし, 海上保安庁に拘束された阻止船から若者達が海に飛び込み, 高波の中を泳いでスパット台船に辿り着き, 上がって10名近くで占拠してしまった。それでもスパット台船は東へ西へとうろろし, 午後4時半過ぎ, ようやく諦めて, 積載用の台船が来て回収された。

4月5日(火) 午前9時15分, 「スーパー固定ブイを積んだ作業台船が中城湾港の岸壁を離れ, 外洋に出て行った」と情報が入り, 現場が緊迫した。10隻以上の阻止船と20人以上の乗組員が集まって阻止行動について打ち合わせをし, 監視のために, 1隻を作業台船が停泊している津堅島沖合に派遣した。作業台

船は、その後中城湾に戻って行き、午後4時には中城湾にいたことが確認された。

各槽には8人ほどが登っている。鉄パイプやクランプの腐食が進んでいるため、このところ施設局の作業は、槽が崩れないように保守することに限られてきている。この日は、第1ポイントでは、槽の傾きが激しい部分に関してだけジャッキアップを了解し、作業はこちらのダイバーの監視下で午前中に行われた。第2ポイントでは、単管の交換を要求してきたが拒否し、「それなら単管2本の撤去だけをしたい」と申し出があったので、「槽がなくなっていく方向ならよい」と、槽の梯子となっていた単管2本の撤去を了解し、作業が行なわれた。第3ポイントでは、クランプ1個の交換を了解し、午後に作業があった。第5ポイントは第2と同じ状況で、槽の梯子となっている2本の単管を撤去した。

4月17日(日) 座り込み1周年記念集会在、辺野古の浜で開催された。命を守る会のおじい・おばあを含む地域住民、近隣のウミンチュ、市民、学生、労働組合員など450人が参加。ジュゴンの親子のバルーンが空を泳ぎ、海上基地計画の白紙撤回まで頑張ることを参加者全員で確認した。

4月20日(水) 施設局は、先週の予告通り、新たな単管足場の設置作業を強行してきた。このところ6、7隻だった作業船等を12隻に増やし、午前9時半ごろ、キャンプ・シュワブで単管約50本を積み、3隻ずつ4つの船団に別れて出発して行った。阻止隊は19隻の阻止船で4班に別れて追走。10時すぎには第3と第5ポイントの中間でダイバーが作業を開始、単管パイプを組み始めましたが、飛び込み隊¹²⁾が作業を阻止。パイプも回収された。

次に作業船が向かった先は第1ポイントの西側。到着と同時にポイントブイを投下したので、ダイバーより先に飛び込み隊が群がった。流れが速いため、飛び込み隊はカヌーにつかまり、ポイントブイを挟んで、業者とにらみ合い。午後4時、作業船はシュワブの浜に帰って行った。すべてのポイントで作業を阻止。

4月21日(木) 施設局は、資材を載せた作業船等13隻を出して足場設置を強行しようとした。しかし、緊急の呼びかけに応えた人々が全県・全国から駆けつけ、これまで最多の約100人が同時に槽に登り、施設局はまったく手が出せない。阻止船は19隻、テント村の座り込みにも約140人が参加し、この日の作業も完全に止めた。

4月26日(火) 深夜の午前2時過ぎ、施設局の船団が辺野古のイノーに現れ、作業を開始した。泊まり込んでいたテント村のメンバーが気づき、急遽連絡を取り合って海上阻止行動に出た6時過ぎには、第5槽にボーリング機材が上げられ、1、3、5の槽が金網で囲われていた。各槽は多数の作業船等で取り囲まれていたが、阻止隊員達は近くまで行って海に飛び込み、槽に取り付いて登り、占拠した。第5槽は目の細かい金網が海底まで張られていたので、ウミンチュのYさんが両手に手鉤をもって腕だけで登り、上から縄梯子を下ろして他の阻止隊員が登った。やがて阻止船も槽に張り付き、作業船団とにらみ合いになった。施設局は、それ以上の作業は何もできなくなったが、この日から「24時間態勢だ」と、夜通しゴムボートを出して監視するようになった。那覇の施設局では、「基地の県内移設に反対する県民会議」¹³⁾が夜間作業をやめるよう、6時間にも及ぶ交渉を行なっ

たが、聞き入れられなかった。そこで、阻止隊も各槽に5～6人で泊り込むようになった。

この日から5月末まで、24時間体制の海上阻止行動が行なわれた。昼間の要員が泊まり込み隊と交代するために一旦槽から撤収した隙を付いた夜襲もあったが、作業は阻止し続けた。

6月1日(水) 朝、業者が来て「槽の金網を撤去させて欲しい」と言ってきて、撤去作業が始まった。施設局は、阻止隊の安全を考慮したのではなく、作業の強行ができないので金網を撤去したのであろうが、3日には、台風の接近を理由に、ボーリング機材や足場板の一部も撤去された。1日からは、槽での夜間泊まり込みも解き、テント村で夜間待機することになった。

6月9日(木) 台風の影響と海兵隊の演習のため、作業はなかった。午前9時半頃、シュワブの浜で、水陸両用戦車が演習を始めた。海上行動隊全員が浜に行く。昨日、水陸両用戦車による演習で宜野座のモズクが被害を受けたばかりでもあり、英語と日本語が入り混じった言葉と車のクラクションを鳴らしての猛抗議が始まる。ところが、昼過ぎ、水陸両用戦車は故障し、辺野古のリーフ内に沈没した。テント村がその異変に気づき、阻止船を出して偵察に行き、スクーバで潜って状況を確認したところ、水深5mの海底に、岩場に挟まる形で水陸両用戦車が沈んでいる。

6月10日(金) 沈没した海兵隊の水陸両用戦車から、油が漏れ出して周囲の海面に広がっている。米軍は、油漏れ対策として化学剤による中和作業を行なうと言うが、現場にゴム

ボート2隻を出し、数人の潜水士が潜って部品状の物を引き揚げるなどするだけで、通常の中和作業で見られる、オイルフェンスを張って薬剤を散布する様子はなかった。辺りには油のにおいが立ち込め、米兵が現場を離れた後にも、海面には幅3、4メートル、長さ2、30メートルほどの油の帯が残っていた。

沈没した水陸両用戦車は、7月15日になってやっと引き上げられたが、その後潜って調べたところ、戦車や引揚げ作業の台船によって、海底の岩場や珊瑚礁が破壊されていた。

8月31日(水) 午後6時30分より、名護市役所前で、座り込み500日集会が開かれる。500人近くが集まり、ジュゴンのバルーンも登場。集会後、若者が先頭になって楽器で盛り上げ、強風の中をヒンプンガジュマル公園までデモ行進。

9月2日(金) すべての槽が撤去された。この後は施設局の作業はなくなり、約1年に及んだ海上阻止闘争は、勝利の内に終了した。この日の夕刊は、次のように伝えている。

米軍普天間飛行場代替施設建設に伴う名護市辺野古のボーリング調査で、那覇防衛施設局は二日午前、掘削ポイントとなる「単管足場」四基全部を台風対策のため、撤去する作業に入った。

施設局は「再設置は、台風シーズンであることを考慮し、状況を見極めながら適切に判断する」とコメント。調査に反対する市民団体は「撤去は運動の成果であるが、作業をやめさせるまで阻止行動を続ける」としている。反対派によると、四つの足場のパイプは数カ月間交換されず、腐食が極度に進んでいる。

施設局側は作業船十二隻を出港させ、午前十一時すぎに作業を開始。ダイバー数人がサビで茶色に染まったパイプを海中から次々に船に揚げ、続いて足場上部の解体作業に入った。パイプは辺野古漁港で一時保管した後、廃棄処分される。(沖縄タイムス社、2005B)

10月27日(木) 地元紙の朝刊は一斉に、日米両政府の在日米軍再編案合意を報道した。一面を「辺野古沿岸案合意」「中南部基地を北部に集約」「国権限で海域使用」などの大見出しが飾っている。その下に掲載された移設案の図には、キャンプ・シュワブ沿岸部を挟んで、南側は辺野古海上の浅瀬に、北側は大浦湾に大きく突き出す1800メートルの滑走路と広い駐機場が描かれている。水深のある大浦湾を埋め立て、軍港化を目論む米軍の狙いが透けて見える。(浦島、2006)

この在日米軍再編案に抗議して、31日には、「日米両政府の横暴許すな 普天間基地の即時閉鎖・撤去、辺野古等基地の県内移設に反対する県民総決起大会」が那覇市の与儀公園で開かれ、雨の中、5千人以上が集まった。

5. 運動の特質

この海上基地建設阻止闘争は、次のような特質を持っている。

①運動目的の複合性

新たな軍事基地建設の阻止・すべての基地の沖縄からの撤去、平安な住民生活の保持と、それとはかなり肌合いの異なる、自然環境の保全(サンゴ礁が広がりジュゴンが棲む海を守る)がこの運動の二大目的であるが、人によっては、日本の沖縄差別の撤廃、アメリカと日本による事実上の植民地支配からの独立なども強く意識

されており、運動目的が複合的である。

②参加者の多様性

参加者が実に多様である。地元のおじい・おばあ、ウチナンチュー、ヤマトンチュー、本土からの帰還者、沖縄への移住者、新・旧左翼、リベラリスト、ナショナリスト、牧師、僧侶、巫女、平和主義者、環境主義者、フェミニスト、議員、労組役員、主婦、学生、定年退職者など、実に多様な人々が参加している。参加者は沖縄在住者にとどまらず全国に広がっており、数日間から数ヶ月間も地元滞留して参加する人、しかもそれを繰り返す人も少なくない。

③闘争手段の幅広さ

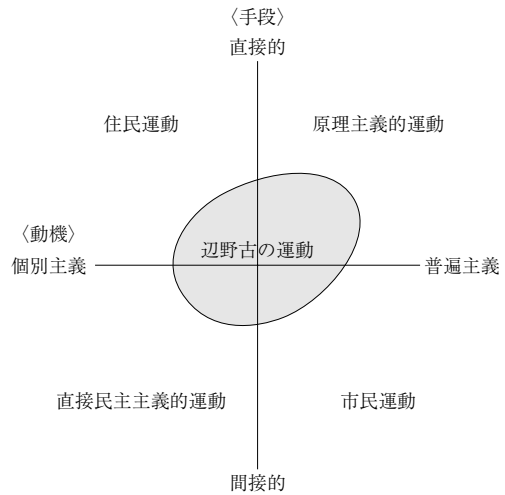
闘争の方法も、非暴力直接行動を基本とするが、関連する様々な団体・運動の組織的・個人的立ち上げ、大規模な集会の開催や選挙活動、裁判闘争、代表者による当局との交渉など、役に立つことなら何でもやろうという姿勢であり、極めて幅が広い。たとえば、2004年4月以降の関連する団体・運動の立ち上げでは、すでに述べたものの他、Yさんによる那覇防衛施設局前でのハンスト(2004年11月末から20日間)とその後の支援者を交えた座り込み、県庁前座り込み(同年12月半ばから)、辺野古の阻止闘争に参加した若者達が地元へ帰って組織した「大阪行動」「名古屋行動」「京都行動」「NO BASE HENOKO Tokyo」「福岡行動」、若者が始めた「名護街宣」(2005年4月から毎土曜)などがある。裁判闘争では、ジュゴン裁判の他にも、辺野古沖ボーリング調査差し止め訴訟(2004年12月提訴)、同第二次訴訟(2005年2月、漁民約20人を原告として提訴)などがある。また、情宣活動も、ビラやパンフレットの他に、何人も参加者がホームページを開設しており、テント村常連の元テレビマンは、計8本ものドキュメンタリーを作り、辺野古の闘いを全国に知ってもらうために、1本500~1,000円で頒布して

いる。

④八年間闘ってきたおじい・おばあちの思いを何よりも重んじる地元第一主義，米軍のイラクなどでの人殺しに加担してきたという加害者意識，子どもたちに平和で自然豊かな沖縄を残そうという未来志向，必ず勝てるとという楽観主義による粘り強さ，など。

図は，運動の動機についての「普遍主義（理念・イデオロギー）——個別主義（個別利害）」の軸と，運動手段についての「直接的（直接行動）——間接的（多数派形成のための活動や裁判闘争）」の軸との組み合わせによる，社会運動の類型である。第1象限の典型は，原理主義的運動（宗教原理主義運動，グリーンピース等）であり，第2象限の典型は，70年代の日本の各地で頻発したような地域住民運動である。第3象限の典型は，住民投票の請求・実施やリコールなどの直接民主主義的政治運動であり，第4象限の典型は，平和，人権，環境問題などに関するオーソドックスな市民運動である。それに対して，辺野古沖海上基地建設反対運動は，第1象限の側面が相対的に強いものの，全ての象限に跨がっている，と考えるのが適切であろう。

図 社会運動の類型



- 1) 沖縄県議会による全会一致での少女暴行事件抗議決議の採択（9月21日），太田知事による米軍基地強制使用のための代理署名拒否の意思表示（9月28日），8万5,000名が参加した米兵による少女暴行事件に抗議する県民総決起集会（10月21日）など。
- 2) 名護市にある55の行政区の一つ。人口約1,800人。
- 3) 海底に不発弾や機雷などが無いかを調べるため，鉄類より生じる微弱な磁場の分布を測定して，これを解析して埋没位置および量などを探ろうとするもの。
- 4) 水深25m以上の深いポイントのボーリングをするための「スーパー固定ブイ」を積載した大型クレーン船。
- 5) 海上ボーリングで使用するプラットフォーム。油圧機構により4本の支柱を軸にボーリング作業床（兼フロート）を昇降させる。辺野古沖では，リーフ外で水深25m以下の地点のボーリングに用いる。
- 6) 海上行動隊員の心得として，相手の体にこちらから触れない，相手に危険が予想されたら即座にやめる，などが繰り返し強調された。
- 7) ミーティングで，一番東の櫓を第1ポイント，航路東側の櫓を第2ポイント，西側リーフ近くの櫓を第3ポイント，西端の櫓を第5ポイントと呼ぶことになった（第4ポイントは，台風対策で撤去されて存在しないが，番号は残しておいた）。
- 8) 第2ポイントの主とも言える70代女性のE

さんは、毛糸の帽子を次々と編んで、テント村の人々にプレゼントした。

- 9) リーフ内の浅い海。太陽の光が底まで射し込み、サンゴをはじめ、さまざまな生物たちが生息している。
- 10) 鉄パイプどうしを繋ぐための金具。
- 11) 喜びを表現する沖縄の踊り。
- 12) スクーバやシュノーケルで潜る阻止隊。
- 13) 沖縄の殆どの平和団体を網羅した市民団体。

〈引用・参考文献〉

- 浅見裕子, 2006, 『沖縄戦世——美ら海を守る』浅見裕子.
- 浦島悦子, 2002, 『豊かな海に基地はいらない——沖縄やんばるからあなたへ』インパクト出版会.
- 浦島悦子, 2005, 『辺野古 海のたたかい』インパクト出版会.
- 浦島悦子, 2006, 「これは「沖縄問題」ではない! ——辺野古のたたかいから在日米軍再編を見る——」『想像』111号.
- 大西照雄, 2005, 『愚直——辺野古からの問い』なんよう文庫.
- 沖縄タイムス社, 2004, 「米軍ヘリ, 沖国大に墜落 / 本館に接触, 炎上 / 乗員1人重傷2人が軽傷」『沖縄タイムス』8月14日・朝刊
- 沖縄タイムス社, 2005A, 「辺野古移設見直し検討 / 普天間飛行場返還 / 政府, 再編協議で提起」『沖縄タイムス』2月7日・朝刊
- 沖縄タイムス社, 2005B, 「施設局, 足場撤去 / 「辺野古」調査 / 台風対策で4基すべて / 反対派「運動の成果」」『沖縄タイムス』9月2日・夕刊
- 黒田華, 2004, 「今日も辺野古の海へ——日本の進路 / 最先端のたたかい」『世界』12月号.
- 合意してないプロジェクト, 2006, 『辺野古現地報告集——2005年8月9日~12月23日』合意してないプロジェクト.
- ジュゴンの家, 2004-2005, 「ジュゴンの家・日誌」<http://www.geocities.co.jp/Epicurean/Table/6398/mokuji.html/>
- ジュゴン保護基金, 2001, 『ジュゴンの海は渡さない——いのちをつなぐ美ら海を子どもたちに』ふきのとう書房.
- ヘリ基地反対協, 2005, 『辺野古アクション』海上ヘリ基地反対・平和と名護市政民主化を求める協議会.

真喜志好一他『沖縄はもうだまされない——基地新設=SAKO合意のからくりを撃つ』, 2000, 高文研.

琉球新報社, 2004, 「市民投票から7年 / 意思再確認 / 「辺野古」ノー」『琉球新報』9月22日・朝刊

〔付記〕 本稿は, 平成16年度専修大学国内研究員制度により沖縄滞在中に実施した研究の成果の一部である。

